

博士論文（要約）

論文題目 日本語命令形式の通時的研究

氏名 北崎 勇帆

# 目次

凡例	xv
序論	1
1 問題の所在	1
2 研究目的・方法	2
3 本稿の構成	3
第1章 現代語体系を中心とする命令形式の用法の再整理	6
1 はじめに	6
2 行為要求表現の成立条件に関する先行研究	8
2.1 Searle (1969)	8
2.2 仁田 (1990, 1991)	9
2.3 益岡・田窪 (1989, 1992)	11
2.4 安達 (2002)	12
2.5 石川 (2002, 2007)	13
2.6 山岡 (2006)	14
2.7 井上 (1993)	15
2.8 先行研究のまとめ	17
3 成立条件の検討	17
3.1 話し手に関する条件	18
3.1.1 遂行可能性の見積もり	18
3.1.2 行為遂行の自明度	18
3.1.3 遂行の望ましさ	19
3.1.4 話し手の優位性	19

3.2	聞き手に関する条件	19
3.2.1	聞き手の存在と遂行能力の有無	19
3.2.2	行為遂行の自明度	20
3.2.3	働きかけによる行為遂行の有無	20
3.3	命題に関する条件	20
3.3.1	行為の意志性	20
3.3.2	行為の実現度	21
3.4	行為要求表現の成立条件	22
4	中心的用法	22
4.1	「これ見よがし」類	23
4.2	あいさつ	23
5	派生的用法	23
5.1	話し手の条件に沿わないもの	24
5.1.1	放任と逆接仮定条件	24
5.1.2	仮定的テミロ	25
5.1.3	嘘をつけ	26
5.2	聞き手の条件に沿わないもの	26
5.2.1	聞き手が遂行能力を持たない	26
5.2.2	聞き手が存在しない	27
5.3	命題の条件に沿わないもの	28
5.3.1	事態が意志的でない	28
5.3.2	行為が未実現でない	29
6	おわりに	29

## 第2章 「であれ」「にせよ（しろ）」の成立と展開 31

1	はじめに	31
2	用例概観	33
2.1	上代	33
2.2	中古	34

2.3	中世前期	36
2.4	中世後期	38
2.5	近世前期	41
2.6	近世後期	42
2.7	近代以降	44
3	調査のまとめ	45
4	「であれ」類の成立	46
5	「にせよ」類の成立	49
6	「にせよ」類への移行	51
7	おわりに	52
<b>第3章 漢文訓読文における「であれ」類と機能語化の文体差</b>		<b>55</b>
1	はじめに	55
2	和文における「マレ」	56
2.1	統語的特徴	56
2.2	語彙的特徴	58
3	訓読文における「マレ」	59
3.1	統語的特徴	59
3.1.1	前接要素	59
3.1.2	後接要素	66
3.2	形態的特徴	67
3.3	語彙的特徴	68
4	構文的な観点から	68
5	中世和漢混淆文における使用状況	71
6	「マレ」の機能語化と文体差	72
7	文体差と文法変化	76
8	おわりに	80

## 第4章 「とはいえ」の成立と展開 83

1	はじめに	83
2	用例概観	85
2.1	とはいえ	85
2.2	ともいえ	88
2.3	とはいえども	91
2.4	さはいえ	92
3	調査のまとめ	93
4	「とはいえ」の成立	95
5	おわりに	98

## 第5章 「遅かれ早かれ」類の成立と定着 101

1	はじめに	101
2	辞書・先行研究における記述	102
3	用例概観	104
3.1	「早晚」のタイプ	104
3.2	「善悪」のタイプ	108
3.3	「多少」のタイプ	109
3.4	「～かれ～かれ」型の生産的使用	109
3.5	形容詞+もあれ	110
4	調査のまとめ	111
5	史的展開とその要因	112
5.1	命令形の逆接仮定条件用法	112
5.2	逆接仮定条件のパターンと「～かれ～かれ」型	114
5.3	反義的な2語の組み合わせ	115
6	おわりに	116

## 第6章 仮定的な「てみろ」の成立と展開 118

1	はじめに	118
2	先行研究と用法の規定	119
3	用例概観	121
3.1	仮定的テミロ成立以前	122
3.2	近世前期	122
3.3	近世中期以降	123
4	調査のまとめ	126
5	仮定的テミロの成立	128
6	仮定的テミロ内部の用法拡張	129
7	おわりに	131

## 第7章 その他の派生的用法 133

1	はじめに	133
2	逆接仮定条件用法と関連するもの	133
2.1	「ともあれ（かくもあれ）」類	133
2.2	「さもあらばあれ」「さもあれ」	137
2.3	「どうせ」「どうで」	139
3	順接仮定条件と関連するもの	140
3.1	「なぜといえ」類	140
3.2	「嘘をつけ」類	142
4	中心的用法との関連で捉えられるもの	145
4.1	1人称主格の命令文と「てしまえ」「てやれ」「ておけ」	145
4.2	過去の事象に対する「命令形+よ」	151
4.3	「これ見よがし」類	154

## 第8章 希求から命令へ 159

1	はじめに	159
2	無意志動詞命令形	160
3	形容詞補助活用命令形	166
4	「ざれ」	170
5	「～あれ」系統の文末形式	170
6	調査のまとめ	172
7	現象解釈	173
7.1	希求から命令へ	173
7.2	関連する表現について	175
7.3	変遷の要因	176
8	おわりに	177

## 第9章 対人的表現から非対人的表現へ 179

1	はじめに	179
2	「間主観性」「間主観化」「対人化」	182
2.1	「間主観性」「間主観化」「対人化」の設定	182
2.1.1	Traugott & Dasher (2002), Traugott (2003, 2007, 2010)	182
2.1.2	小柳 (2014, 2016a)	183
2.2	一方向性の反例	184
3	非対人的用法から対人的用法へ	186
3.1	評価形式	187
3.2	話し手の希望・感情	188
3.3	疑問文	189
3.4	素材提示	189
4	対人的用法から非対人的用法へ	192
4.1	事態成立を放任するもの	193

4.2 逆接仮定条件を作るもの	194
4.3 禁止を含意するもの	196
4.3.1 仮定的テミロ A 類	196
4.3.2 「嘘をつけ」類	196
4.4 順接仮定条件を構成するもの	197
4.4.1 「なぜといえ」類	197
4.4.2 仮定的テミロ B 類	197
4.5 聞き手に直接向かわなくなるもの	198
4.5.1 話し手に向かう	198
4.5.2 第三者に向かう	199
5 「間主観性」「対人性」の再検討	199
6 おわりに	201

## **第 10 章 命令形式から条件形式へ** **203**

1 はじめに	203
2 接続形式の構成要素	205
3 命令文から条件文へ	206
3.1 順接条件になるもの	207
3.1.1 仮定的テミロ	207
3.1.2 「なぜといえ」類	208
3.2 逆接条件になるもの	209
3.2.1 「であれ」類	209
3.2.2 「にせよ」類	210
3.2.3 その他の表現	211
4 条件文から命令文へ	212
5 命令文と条件文の近接性	213
6 意味的変化の種類と関連付けて	215
7 おわりに	218



<b>第 11 章 「(よ) うと」の一群の成立と展開</b>	<b>220</b>
1 はじめに	220
2 用例概観	221
2.1 成立前史	222
2.2 中世後期	224
2.3 近世以降	227
3 調査のまとめ	228
4 「(よ) うと」の成立	230
4.1 「む+とも」から「むとも」へ	230
4.2 「～むは」「～むも」	231
5 「(よ) うが」の成立	233
6 おわりに	234
<b>結論</b>	<b>237</b>
1 はじめに	237
2 個別事例に関して	237
3 類型化に関して	239
<b>附章 情報学的手法の日本語史研究への応用</b>	<b>241</b>
1 はじめに	241
2 洒落本を対象とした東西対照コーパスの設計と構築	242
2.1 資料	242
2.1.1 『月花余情』組	242
2.1.2 『郭中奇譚』組	244
2.2 文書構造と構築の方針	246
2.3 改変の検証	249

2.3.1 『月花余情』組	249
2.3.2 『郭中奇譚』組	250
2.4 利用可能性	251
3 動的計画法を用いた狂言台本の語の対応付け	252
3.1 使用するデータ	252
3.2 自動対応付け	254
3.3 実装	255
3.4 実行結果と課題	257
4 手法の適用と課題	259
4.1 文対応の問題	260
4.1.1 文対応の問題 (1)	260
4.1.2 文対応の問題 (2)	262
4.2 語対応の問題	266
5 おわりに	267
<b>既発表論文との関係</b>	<b>269</b>
<b>参考文献</b>	<b>272</b>
<b>使用資料</b>	<b>289</b>
1 上代	289
2 中古	289
2.1 散文	289
2.2 韻文	290
2.3 訓点資料 (中世含む)	290
2.4 古辞書	292
3 中世前期	292
3.1 散文	292
3.2 説話集	292
3.3 仏教資料 (法語など)	293

3.4	軍記物語	293
3.4.1	軍記物語（平家）	293
3.4.2	軍記物語（平家以外）	294
3.5	韻文	294
3.6	紀行・伝記	294
3.7	擬古文	294
3.8	書状・古記録	295
3.9	古辞書	295
3.10	その他	295
4	中世後期	295
4.1	歌論書・能楽論書	295
4.2	室町物語	296
4.3	軍記物語	296
4.4	抄物	296
4.5	キリシタン資料	297
4.6	狂言台本（近世含む）	297
4.6.1	写本	297
4.6.2	版本	298
4.7	その他	298
5	近世前期	298
5.1	浄瑠璃台本	299
5.1.1	世話浄瑠璃	299
5.1.2	時代浄瑠璃	299
5.2	歌舞伎台帳	300
5.3	噺本・仮名草子	301
5.4	浮世草子	301
5.5	東国資料	302
6	近世後期	302
6.1	近世後期上方	302
6.1.1	浄瑠璃	302

6.1.1.1	世話浄瑠璃	302
6.1.1.2	時代浄瑠璃	302
6.1.2	歌舞伎台帳	302
6.1.3	噺本	302
6.1.4	上方洒落本	302
6.1.5	上方滑稽本	303
6.2	近世後期江戸	303
6.2.1	歌舞伎台帳	303
6.2.2	噺本	303
6.2.3	黄表紙	303
6.2.4	江戸洒落本	303
6.2.5	談義本（近世前期・中期含む）・滑稽本	304
6.2.6	人情本	305
6.2.7	読本	305
6.2.8	その他	306
7	近代	306
8	現代	306

<b>付録</b>	<b>命令形式・命令表現研究文献目録</b>	<b>308</b>
-----------	------------------------	------------

(3) 本文

5年以内に出版予定

## 参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to do things with words*, M.A.: Haavard University Press.
- Bell, A. 1984. Language style as audience design. *Language in Society*. 13(2). pp.145-204.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and form*. London; New York: Longman.
- Boogaart, R. & Trnavac, R. 2004. Conditional imperatives in Dutch and Russian. *Linguistics in the Netherlands*. 21. pp.25-35.
- Clark, B. 1993. Relevance and “pseudo-imperatives”. *Linguistic and Philosophy*. 16. pp.79-121.
- Fortuin, E. 2000. *Polysemy or monosemy: Interpretation of the Imperative and the Dative-infinitive Construction in Russian*. Amsterdam: University of Amsterdam.
- Fortuin, E. & Boogaart, R. 2009. Imperative as conditional: From constructional to compositional semantics. *Cognitive Linguistics*. 20. pp.641-679.
- Halliday, M.A.K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Heine, B & Tania, K. 2002. *World Lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kinuhata, T. 2012. Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle ka. *Journal of Pragmatics*. 44. pp.798-814.
- Mori, H. 2006. The V-te-miro Conditional Imperative and Other Imperative Forms: Grammaticalization of Lexemes in Constructions. *Journal of Japanese Linguistics*. 22. pp.1-16.
- Narrog, H. 2012. Beyond intersubjectification: Textual uses of modality and mood in subordinate clauses as part of speech-act orientation. *English Text Constructions*. 5(1). pp.29-52.
- . 2015. (Inter)subjectification and its limits in secondary grammaticalization. *Language Sciences*. 47B. pp.148-160.
- Russell, B. 2007. Imperatives in conditional conjunction. *Natural Language Semantics*. 15. pp.131-166.
- Searle, J. 1969. *Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language*. London: Cambridge University Press.
- Shinzato, R. 2002. From Imperatives to conditionals - the case of shiro are temiro in Japanese. *CLS*.

38. pp.585-600.
- . 2007. (Inter)subjectification, Japanese syntax and syntactic scope increase. *Journal of Historical Pragmatics*. 8(2). 171-206.
- Svahn, A. 2013. The Perfective Imperative in Japanese. Frellesvig, B & Sells, P(eds). *Japanese/Korean Linguistics*. 20. 453-466.
- . 2016. *The Japanese Imperative*(TRAVAUX DE L'INSTITUT DE LINGUISTIQUE DE LUND 54). Lund University.
- Takahashi, H. 2002. Pseudo-imperatives & Negative Polarity Items: The Speaker Commitment Hypothesis. 北海道大学文学研究科紀要 . 106. pp.17-33.
- . 2012. *A cognitive linguistic analysis of the English imperative : with special reference to Japanese imperatives*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. Hickey, R(eds.). *Motives for language change*. London: Cambridge University Press. pp.124-142.
- . 2007. (Inter)subjectification and unidirectionality. *Journal of Historical Pragmatics*. 8(2). pp.295-309.
- . 2010. (Inter)subjectivity and (inter)subjectification :A reassessment. Davidse, K. Vandelanotte, R. Cuyckens, H(eds.). *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*. Berlin: De Gruyter Mouton. pp.29-71.
- . 2011. 文法化と（間）主観化（福本広二訳）. 高田博行・椎名美智・小野寺典子編著 . 歴史語用論入門 . 大修館書店 . pp.73-90.
- Traugott, E. C. & Dasher, R. B. 2002. *Regularity in Semantic Change*. London: Cambridge University Press.
- 青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1(3), pp.47-60.
- （2010）「近代語における「断り」表現：対人配慮の観点から」『語文研究』108・109, pp.164-152.
- （2011）「日本語における文法化と主観化」澤田治美編『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房, pp.111-136.
- （2018）「「ござる」の丁寧語化をめぐって」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 4』ひつじ書房, pp.155-175.
- 青木伶子（1973）「接続詞および接続詞的語彙一覧」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文

- 法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院, pp.210-253.
- 秋田陽哉 (2015) 「源平盛衰記に見られる命令を表す「べし」」松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院, pp.309-317.
- 浅見徹 (1981) 「上代語」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編『講座日本語学 3 現代文法との史的対照』明治書院, pp.1-29.
- 安達太郎 (2002) 「命令・依頼のモダリティ」『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版, pp.42-78.
- 安部清哉 (2000) 「和漢混淆の史変遷における語の「意味負担領域」:「とし」「スミヤカ」「早し」の場合」遠藤好英編『語から文章へ』「語から文章へ」編集委員会, pp.1-15.
- (2002) 「『源氏物語』ほか平安和文資料における「とし」「スミヤカ」「早し」:意味負担領域から見る和漢混淆史」フェリス女学院大学編『源氏物語の魅力を探る』翰林書房, pp.218-245.
- 有田節子 (2015) 「「差し迫った命令」に関する覚え書き:日本語のテンスとモダリティの接点」『九州大学言語学論集』 35, pp.382-397.
- 安志英 (2010) 「要求・依頼を表す複合辞「～てほしい」の通時的研究」『일본학보 (The Korean Journal of Japanology)』 84, pp.197-208.
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店.
- 石川美紀子 (2002) 「命令に関する試論:語用論的条件と構文的条件との関係から」『名古屋大学国語国文学』 91, pp.90-77.
- (2007) 「命令形の働きに関する考察:意志動作としての性格づけと動作主の設定」『名古屋大学国語国文学』 100, pp.184-172.
- (2008) 『日本語における命令形命令文の研究:命令表現の解明に向けて』名古屋大学大学院文学研究科 2007 年度博士論文.
- 石川美紀子・北村雅則 (2007) 「伝達場面の構造からみた命令形の諸機能」『言語処理学会第 13 回年次大会発表論文集』.
- 石田春昭 (1939) 「コソケレ形式の本義 (上・下)」『国語と国文学』 16(2・3), pp.66-82・68-82.
- 井島正博 (2013) 「当為表現の構造と機能」『日本語学論集』 9, pp.133-173.
- 出雲朝子 (1985) 「「はさみこみ」について:文法史的考察」『国語学』 143, pp.14-26.
- 一色舞子 (2011) 「日本語の補助動詞「一てしまう」の文法化:主観化, 間主観化を中心に」



- 『日本研究（高麗大学日本研究センター）』 15, pp.201-221.
- 乾善彦（2011）「『三宝絵』の三伝本と和漢混淆文」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』  
おうふう, pp.89-101.
- 犬飼隆（1998）「木簡の「ひとつひとつ」「ひとりひとり」」『萬葉』 165, pp.52-54.
- 井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」：命令文・依頼文を例に」  
『国立国語研究所報告 105』 研究報告集 14, pp.333-360.
- 林禊映（2015）「近世語における副詞「どうせ」「どうで」の意味用法」『日本語学論集』  
11, pp.167-152.
- 岩井良雄（1974）『日本語法史 江戸時代編』 笠間書院.
- 上野左絵（2016）「近松浄瑠璃本のコーパス化：「語り」のテキストをどう扱うか」『じん  
もんこん 2016 論文集』 pp.25-30.
- 江口匠（2016）「〈逆接〉を表す「て」をめぐって」『人文』 14, pp.59-77.
- 呉泰均（2012）「場面形成上の聞き手待遇における「聞き手」の捉え方」『研究論集（北海  
道大学大学院文学研究科）』 12, pp.209-220.
- 大木一夫（2012）「不変化助動詞の本質，統紹」『国語国文』 81(9), pp.1-17.
- 大塚光信（1962）「助動詞ヨウについて：その成立と性格」『国語国文』 31(4), pp.44-58.
- 大坪併治（1935）「禁止表現法史」『国語国文』 5(10), pp.1-53.
- （1976）「訓点語の翻訳文法」『大坪併治教授退官記念国語史論集』 表現社, のち  
大坪（1981）第 10 章, pp.461-479.
- （1981）『平安時代における訓点語の文法』 風間書房.
- 大野晋（1990）「嘘をつくとなというのに嘘をつけとは？」大野晋・丸谷才一・大岡信・井  
上ひさし『日本語相談 2』 朝日新聞社, pp.167-170.
- （1993）『係り結びの研究』 岩波書店.
- 大浜巖比古（1957）「叙景歌と人麻呂：その成立の契機としての「靡けこの山」」『萬葉』  
25(2), pp.26-38.
- 岡崎友子（2011）「指示詞系接続語の歴史的変化：中古の「カクテ・サテ」を中心に」青  
木博史編『日本語文法の歴史と変化』 くろしお出版, pp.67-87.
- 荻野千砂子（2008）「近世前期のテヤル：現代語のベネファクティブとの比較」『中村学園  
大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』 40, pp.11-17.
- 小田勝（2006）『古代語構文の研究』 おうふう.

- (2007) 『古代日本語文法』 おうふう.
- (2010) 『古典文法詳説』 おうふう.
- (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院.
- (2018) 「古代語における形式用言を用いた複合辞とその用例」 藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』 和泉書院, pp.3-20.
- 尾谷昌則 (2015) 「接続詞「なので」の成立について」加藤重広編『日本語語用論フォーラム 1』 ひつじ書房, pp.183-208.
- 尾上圭介 (1979) 「「そこにすわる!」: 表現の構造と文法」『言語』 8(5) 尾上 (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版所収.
- (2012) 「不変化助動詞とは何か: 叙法論と主観表現要素論の分岐点」『国語と国文学』 89(3), pp.3-18.
- 小野寺典子 (2011) 「談話標識 (ディスコースマーカー) の歴史的発達 英日語に見られる (間) 主観化」高田博行・椎名美智・小野寺典子編著『歴史語用論入門』 大修館書店, pp.73-90.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 春日政治 (1942) 『西大寺本金光明最勝王経古点の研究 研究篇』 岩波書店.
- (1955) 「聖語蔵本菩薩善戒経点」『国語国文』24(11) 春日政治 (1956) 『古訓点の研究』 風間書房所収.
- 加藤重広 (2009) 「日本語形容詞再考」『北海道大学文学研究科紀要』 129, pp.63-89.
- 門脇恵里香・田中江扶 (2015) 「日英語の条件命令文: Say that again, and I'll beat you がもう言うなという意味になるのはなぜか」『信州大学教育学部研究論集』 8, pp.51-60.
- 神永正史 (2009) 「虎明本のテアル構文: 競合という観点から」『筑波日本語研究』 14, pp.35-52.
- 亀田堯宙・李元・内山清子・武田英明・相澤彰子 (2013) 「論文における要約記述に対応するパラグラフの同定手法」『JSAI2013』.
- 川上徳明 (1976) 「源氏物語の命令・勧誘表現」『国語国文』 45(11), pp.17-39.
- (2005) 「命令・勧誘表現の体系的研究」『おうふう』.
- 川口良 (2017) 「若者ことばに見る (間) 主観化について: 「大丈夫」の新用法に関して」『文学部紀要 (文教大学)』 31(1), pp.37-57.
- 河瀬彰宏・市村太郎・小木曾智信 (2013) 「TEI:P5 に基づく近世口語資料の構造化とその

- 問題点」『じんもんこん 2013 論文集』 pp.7-12.
- 菅野宏 (1959)「命令法「靡け」をめぐって」『福島大学学芸学部論集 人文科学』10(2), pp.26-39.
- 菊田千春 (2011)「複合動詞テミルの非意志的用法の成立」『日本語文法』11(2), pp.43-59.
- (2012)「テミロ条件命令文とその成立過程：構文ネットワークの役割」『日本語文法学会第13回大会予稿集』 pp.59-65.
- 北崎勇帆 (2015)「虎明本狂言集に見られる命令・要求表現」『日本語学論集』10, pp.217-239.
- 金水敏 (2004)「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版, pp.47-56.
- (2005)「日本語敬語の文法化と意味変化」『日本語の研究』1(3), pp.18-31.
- (2011)「丁寧語の語源と発達」高田博行・椎名美智・小野寺典子編著『歴史語用論入門』大修館書店, pp.163-173.
- 金水敏・今仁生美 (2000)『現代言語学入門 4 意味と文脈』岩波書店.
- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp.48-63.
- (1953)「不変化助動詞の本質」『国語国文』22(2・3), pp.1-17・15-35.
- 草野清民 (1901)『草野氏日本文法』富山房.
- 工藤力男 (1997)「書評 東野治之著『長屋王家木簡の研究』」『萬葉』162, pp.46-59.
- 国広哲弥 (1982)「人称の用法と構造：日英語を対照して」『言語学演習 '82』 pp.7-12.
- グループ・ジャマシイ (1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 慶野正次 (1936)「枕草子「物語もせよ」について」『歴史と国文学』15(5) 慶野正次 (1976)『形容詞の研究』笠間書院所収.
- 鴻野知暁 (2010)「ゾの係り結びの発生について」『国語国文』79(12), pp.37-54.
- 此島正年 (1966)『国語助詞の研究：助詞史の素描』桜楓社.
- (1973)『国語助動詞の研究：体系と歴史』桜楓社.
- 小林賢次 (1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
- (2005)「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』1(3), pp.182-171.
- 小林隆 (2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房.
- 小林芳規 (1982)「古代の文法Ⅱ」築島裕編『講座国語史 4 文法史』大修館書店, pp.149-

- 386.
- (1987) 『角筆文献の国語学的研究 研究編』 汲古書院.
- 小柳智一 (1997) 「中古のバカリについて：限定・程度・概数量」『国語と国文学』 74(7), pp.43-57.
- (2003) 「限定のとりたての歴史的変化：中古以前」 沼田善子・野田尚史編 『日本語のとりたて：現代語と歴史的変化・地理的変異』 くろしお出版, pp.159-177.
- (2009) 「同語反復仮定の表現と従属句化」『福岡教育大学国語科研究論集』 50, pp.1-18.
- (2013) 「言語変化の段階と要因」『学芸国語国文学』 35, pp.14-25.
- (2014) 「「主観」という用語：文法変化の方向に関連して」 青木博史・小柳智一・高山善行編 『日本語文法史研究 2』 ひつじ書房, pp.195-219.
- (2016) 「文法変化の方向と統語的条件」 大木一夫・多門靖容編 『日本語史叙述の方法』 ひつじ書房, pp.55-73.
- (2016) 「対人化と推意」『国語研究 (国学院大学)』 79, pp. 左 71-84.
- 近藤政美 (2008) 『天草版『平家物語』の原拠本, および語彙・語法の研究』 和泉書院.
- 近藤政行 (1996) 「動詞命令形の機能」『徳島文理大学比較文化研究所年報』 12, pp.35-44.
- 阪倉篤義 (1977) 「国語史の時代区分」 松村明編 『講座国語史 1 国語史総論』 大修館書店, pp.201-260.
- 桜井光昭 (1971) 「近代の敬語 I」 辻村敏樹編 『講座国語史 5 敬語史』 大修館書店, pp.185-282.
- 佐田智明 (1978) 「平安朝における終助詞「かし」について」 春日和男教授退官記念 語文論叢刊行会 『春日和男教授退官記念 語文論叢』 桜楓社, pp.257-271.
- 佐藤友哉 (2012) 「命令文の基本的機能」『熊本県立大学大学院文学研究科論集』 5, pp.1-15.
- 佐藤宣男 (1983) 「とかく」 佐藤喜代次編 『講座日本語の語彙 第 11 巻 語誌Ⅲ できる～わんぱく』 明治書院, pp.57-60.
- 佐野宏 (2007) 「書評 桑原祐子著『正倉院文書の国語学的研究』」『萬葉』 198, pp.55-64.
- 嶋田紀之 (2009) 「「V てみる」の多義性と文法化」『日本認知言語学会論文集』 9, pp.132-142.

- 白川博之（1992）「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』76, pp.36-48.
- （1993）「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」『広島大学日本語教育学科紀要』3, pp.7-14.
- 白藤礼幸（2007）「萬葉における表現と形式：願望・疑問・希求・命令表現について」『上代文学』99, pp.18-29.
- 城田俊（1977）「《う／よう》の基本的意味」『国語学』110, pp.37-46.
- 菅原範夫（1982）「太平記における希求・懇請の言い方について：終助詞「かし」の用法を中心として」『鎌倉時代語研究』5, pp.111-127.
- 杉本和之（1995）「意志動詞と無意志動詞の研究 その1」『愛媛大学教養部紀要』28(3), pp.47-60.
- 杉山俊一郎（2016）「古代日本語における「にして」の意味領域について」『訓点語と訓点資料』137, pp.1-22.
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 鈴木丹士郎（1965）「馬琴の文語：形容詞カリ活用の場合」『国語学』60, pp.62-73.
- （1995）「近世における形容詞補助活用の展開」『専修国文』57, pp.103-122.
- 鈴木康志（2017）「ドイツ語の条件的命令文について」『言語と文化（愛知大学）』36, pp.29-44.
- 砂川有里子（2006）「「言う」を用いた複合辞：文法化の重層性に注目して」藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院, pp.23-40.
- 関一雄（1985）「とく・早く・スミヤカニの意味：平安と院政鎌倉の用例について」『山口大学文学会志』35, pp.1-22.
- 曾田文雄（1957）「訓点語彙：高野山光明院蔵蘇悉地羯羅經承保元年点」『訓点語と訓点資料』8, pp.29-40.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子編著（2011）『歴史語用論入門』大修館書店.
- 高梨信乃（2002）「評価のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, pp.80-120.
- （2010）『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』くろしお出版.
- 高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.117-148.
- 高橋美奈子（2016）「「トハイエ」を含む文の分析」『四天王寺大学紀要』62, pp.61-79.

- 高宮幸乃（2004）「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立：不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15, pp.124-110.
- （2005）「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.104-92.
- 高山善行（2005）「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1(4), pp.1-15.
- （2016）「ケム型疑問文の特質：間接疑問文の史的研究のために」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究3』ひつじ書房, pp.47-64.
- 田川拓海（2014）「愚痴命令文と終助詞」『TwifULL Slim 27 発表資料』.
- 立見英士・笹野遼平・高村大地（2014）「小説における本文とあらすじ文の対応付け」『言語処理学会第20回年次大会発表論文集』pp.496-499.
- 田中章夫（1984）「接続詞の諸問題：その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法4 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院, pp.81-123.
- 田中草大（2013a）「変体漢文の語彙の性格について：文体間共通語「オドロク」の用法調査による」『訓点語と訓点資料』130, pp.87-102.
- （2013b）「変体漢文の文体的性格を測る手段について：形容詞ヒサシと形容動詞ワヅカナリを例に」『日本語学論集』9, pp.29-52.
- （2014）「平安時代の変体漢文語彙と和文語・漢文訓読語の関係について」『国語と国文学』91(1), pp.50-66.
- （2015）「平安時代における変体漢文の日常語的性格について：文体間共通語オク（置）を用いて」『日本語学論集』11, pp.11-25.
- （2016）「平安時代の変体漢文諸資料間における言語的性格の相違について」『国語語彙史の研究』35, pp.87-104.
- 田中牧郎（2013）「説話の平行コーパスの設計：平安・鎌倉時代の文体変異の研究に向けて」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.259-268.
- 田中牧郎・山元啓史（2014）「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応：語の文体的価値の記述」『日本語の研究』10(1), pp.16-30.
- 田中雅和（1992）「条件句構成の「雖」・「トイヘドモ」・「トイフトモ」について」『鎌倉時代語研究』15, pp.32-77.
- 田辺和子（2008）「「というか」の文法化に伴う音韻的变化の一考察」『明海日本語』13, pp.55-63.



- 玉村禎郎（1991）「「是非」の語史：副詞用法の発生まで」『語文』56, pp.20-38.
- （2006）「「善悪」の副詞用法の発生：近代語への歩み」『近代語研究』13, pp.17-31.
- （2008）「「有無」の語史：副詞用法発生前史」『杏林大学外国語学部紀要』20, pp.41-49.
- 田村悦子（1961）「西行の筆跡資料の検討：御物本円位仮名消息をめぐって」『美術研究』214, pp.224-248.
- 陳慧玲（2007）「「命令形」の諸相：近代東京語を対象として」『文学研究論集（明治大学）』26, pp.1-23.
- 築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会.
- 鶴久（1962）「所謂形容詞のかり活用及び打消の助動詞ザリについて：特に萬葉集における義訓すべき不安，不遠，不近，不悪，不有をめぐって」『萬葉』42, pp.16-35.
- 鄭夏俊（1993）「日本語における「ル」・「タ」形とモダリティ：文末形式を中心に」『国語学研究と資料』17, pp.24-34.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 土井光祐（2000）「明恵関係聞書類としての『観智記』鎌倉時代中期写本の基礎的研究」『鎌倉時代語研究』23, pp.141-164.
- 東野治之（1996）『長屋王家木簡の研究』塙書房.
- 富樫純一（2005）「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」：その意味と諸用法をめぐって」『筑波日本語研究』10, pp.1-18.
- 土岐武治（1967）『堤中納言物語の研究』風間書房.
- （1976）『堤中納言物語の注釈的研究』風間書房.
- 土岐留美江（1992）「江戸時代における助動詞「う」：現代語への変遷」『都大論究』29, pp.37-49.
- 時枝誠記（1954）『日本文法 文語編』岩波書店.
- 富岡宏太（2016）「中古和文の「命令形カシ」」『国学院雑誌』117(8), pp.1-14.
- 豊田圭子（2013）「テヤルの史的変遷」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』35, pp.131-145.
- 豊田豊子（1974）「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1, pp.77-95.

- 中崎崇 (2002) 「独話場面における終助詞「ヨ」の機能」『日本語・日本文化研究 (大阪大学)』 12, pp.105-115.
- (2004) 「命令形式と終助詞「ヨ」」『Studium』 31, pp.28-39.
- (2007) 「命令形式と終助詞「ヨ (2)」」『Studium』 34, pp.70-83.
- (2012) 「一人称主格をとる命令文に関する一考察」『表現研究』 95, pp.11-24.
- 永田里美 (2000) 「勧誘表現「～マイカ」の衰退：狂言台本を資料として」『筑波日本語研究』 5, pp.105-120.
- (2002) 「狂言台本虎明本における否定疑問文「動詞＋ヌカ」：行為要求表現という観点から」『筑波日本語研究』 7, pp.82-94.
- (2003) 「否定疑問文による行為要求表現の史的变化：「～マイカ」から「～ヌカ／ナイカ」へ」『筑波日本語研究』 8, pp.90-104.
- 長野ゆり (1994) 「「～てみる」の用法の一側面：命令形・条件表現をとる「～てみる」の用法について」『現代日本語研究』 1, pp.85-94.
- (1995) 「シロとシテミロ：命令形が仮定を表す場合」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版, pp.655-661.
- (1996) 「仮定をあらわす「～てみろ」について」『現代日本語研究』 3, pp.123-130.
- (1998) 「仮定を表す「～てみろ」の用法について」『日本語教育』 96, pp.143-153.
- 中村幸弘 (1993) 「放任表現考」小泉弘・林睦朗編『日本文学の伝統』三弥井書店, pp.254-274, 中村幸弘 (2005) 『補助用言に関する研究』右文書院所収.
- (2005) 「松田修の放任表現」『野州国文学』 76, pp.1-39.
- (2006) 「近代評論文の放任表現」『国学院大学紀要』 44, pp.159-188.
- (2013) 「「時しもあれ」の「あれ」の活用形」『野州国文学』 86, pp.1-16.
- 仁田義雄 (1988) 「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』 7(5), pp.34-37.
- (1990) 「働きかけの表現をめぐる」佐藤喜代治編『国語論究 2 文字・音韻の研究』明治書院, pp.369-406.
- (1991) 「働きかけの表現」『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房, pp.225-262.
- (2016) 『文と事態類型を中心に』くろしお出版.



- 野村剛史 (1995a) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64(9), pp.1-27.
- (1995b) 「ズ, ム, マシについて」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院, pp.2-21.
- 河周始 (2010) 『中近世日本語の終助詞』専修大学出版局.
- 蜂谷清人 (1977) 『狂言台本の国語学的研究』笠間書院.
- 濱田敦 (1948) 「上代に於ける希求表現について」『国語国文』17(1), pp.21-46.
- 林田明子 (2015) 「「御～あり」・「御～候ふ」の尊敬形式としての発達度の違い: 「～せ・させたまふ」との対照から」『国語研究 (国学院大学)』78, pp.48-61.
- 原卓志 (1991) 「漢語「善悪」「是非」「決定」「必定」の副詞用法について」『鎌倉時代語研究』14, pp.5-31.
- (2005) 「覚一本『平家物語』における「行為指示表現」について」『鳴門教育大学研究紀要 人文・社会科学編』20, pp.11-25.
- 原口裕 (1978) 「連体形準体法の実態: 近世後期資料の場合」春日和男教授退官記念語文論叢刊行会『春日和男教授退官記念 語文論叢』桜楓社, pp.431-450.
- 原田幸一 (2015) 「若年層の日常会話における「トイウカ」の使用: 縮約形「てか・つか」に注目して」『日本語の研究』11(3), pp.16-31.
- 原田康也・本多久美子 (1997) 「日本語の全称量化表現: 「も」の〈全称並列〉について」『早稲田大学語学教育研究所紀要』52, pp.35-56.
- 彦坂佳宣 (1975) 「大蔵流狂言「虎明本」から「虎寛本」へ: その待遇表現の変化」『国語学研究』14, pp.47-61.
- 日高水穂 (2005) 「方言における文法化: 東北方言の文法化の地域差をめぐって」『日本語の研究』1(3), pp.77-92.
- (2006) 「文法化」佐々木冠ほか『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店, pp.181-219.
- (2013) 「複合辞「という」の文法化の地域差」藤田保幸編『形式語研究論集』和泉書院, pp.285-300.
- 姫野伴子 (1997) 「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』33(1), pp.169-178.
- 深津周太 (2010) 「近世初期における指示詞「これ」の感動詞化」『日本語の研究』6(2), pp.1-15.

- (2013)「動詞「申す」から感動詞「モウシ」へ」『国語国文』82-04, pp.19-36.
- (2014)「動作を促す感動詞「ソレ／ソレソレ」の成立について」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房, pp.107-129.
- (2018a)「副詞「ちょっと」の感動詞化:行為指示文脈における用法を契機として」高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房, pp.218-239.
- (2018b)「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法:感動詞化の観点から」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院, pp.41-55.
- 藤田保幸 (1998)「複合助辞「トイッテモ」「トイッテ」「トハイエ」について」『滋賀国文』36, pp.12-25.
- (2004)「引用研究前史」伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法:漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ』和泉書院, pp.599-626.
- (2008)「複合接続形式「～(よ)うと／(よ)うが」について」『日本言語文化研究』12, pp.13-28.
- (2016)「引用形式の複合辞への転成について」『国文学論叢』61, pp.307-321.
- 藤田保幸・山崎誠 (2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所.
- 船城俊太郎 (2004)「平安時代の日本語漢文にみられる中国俗語の疑問詞三種:多少・争・早晚」『西北出土文献研究』創刊号, 船城俊太郎 (2011)『院政時代文章様式史論考』勉誠出版 所収.
- 古田恵美子 (2003)「中国語「遮莫」「任他」等の受容と「さもあらばあれ」」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ 人文科学』5, pp.1-12.
- 方香蘭 (2008)「日本文献における「多少」の意味・用法についての語史」『国語国文学誌 (広島女学院大学)』38, pp.51-66.
- 前田直子 (1993)「逆接条件文「～テモ」をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版, pp.149-167.
- 前田広幸 (1990)「あいさつ言葉「お+連用形」の働き 命令法系統のものを中心に」『女子大文学 国文篇 (大阪女子大学)』41, pp.57-77.
- 増井典夫 (1994)「近世後期上方語研究の課題:近世後期名古屋方言を視野において」『淑徳国文』35, pp.47-64.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989)『基礎日本語文法』くろしお出版.
- ・———— (1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.

- 松尾弘徳（2009）「新方言としてのとりたて詞ゲナの成立：福岡方言における文法変化の一事例」『語文研究』107, pp.1-17.
- 松木正恵（1990）「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2, pp.27-52.
- 松村明（1972）『国語史概説』秀英出版.
- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』明治書院.
- 松本宙（1986）「中世における慣用句類型表現の変容」佐藤喜代治編『国語論究1 語彙の研究』明治書院, pp.174-195.
- 丸川雄三・岩山真・奥村学・新森昭宏（2002）「ローカルアラインメントを用いたテキスト間の柔軟な対応付け」『研究報告自然言語処理』2002-NL-151, pp.23-28.
- 宮内佐夜香（2013）「接続詞「なので」の書き言葉における使用について：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として」『中京国文学』32, pp.106-93.
- 三宅知宏（2017）「日本語の発見構文」天野みどり・早瀬尚子編『構文の意味と拡がり』くろしお出版, pp.65-78.
- 宮地裕（1971）『文論』明治書院.
- （1975）「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」鈴木知太郎博士の古稀を祝う会編『鈴木知太郎博士古稀記念 国文学論叢』桜楓社, pp.803-817.
- （1995）「依頼表現の位置」『日本語学』14(10), pp.4-11.
- 宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』集英出版.
- 村上三寿（1993）「命令文：しろ、しなさい」『ことばの科学6』むぎ書房, pp.68-115.
- 村田葉穂子（1993）「「ケレドモ」の成立：「閉じた表現」への推移と不変化助動詞「マイ」成立との有機的連関を見据えて」『国語語彙史の研究』16, pp.205-222.
- 森英樹（2006）「3つの命令文：日英語の命令文と潜在型／既存型スケール」『言語研究』129, pp.135-160.
- （2011）「命令形が条件解釈を持つときの構文タイプ」大庭幸男・岡田禎之編『意味と形式のはざま：阪大英文学会叢書6』英宝社, pp.209-222.
- （2014）「「Vてみろ」条件命令文のモダリティと再分析構造」『言語研究』145, pp.1-26.
- 森勇太（2010）「行為指示表現の歴史的変遷」『日本語の研究』6(2), pp.78-92.

- (2014)「行為指示表現としての否定疑問形の歴史：上方・関西と江戸・東京の対照から」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究 2』ひつじ書房, pp.153-288.
- (2015)「条件表現を由来とする勧め表現の歴史：江戸・東京と上方・関西の対照から」『近代語研究』18, pp.47-64.
- 守岡知彦・師茂樹 (2004)「文字素性に基づく文字処理」『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2004-CH-62, pp.53-60.
- 森田良行 (1973)「感動詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院, pp.178-208.
- (1989)『基礎日本語事典』角川書店.
- 森田良行・松木正恵 (1989)『日本語表現文型』アルク.
- 森野崇 (1992)「終助詞「かし」の機能」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院, pp.57-273.
- 森山卓郎 (2000)『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房.
- (2016)「反期待的命令文小考：「勝手にしろ」「嘘をつけ」などについて」『中日語言文化研究』25, pp.101-109.
- 森山由紀子 (2006)「日本語における対者敬語の成立：『古今和歌集』詞書にみる「ハベリ」文法化の過程」『語用論研究』8, pp.93-107.
- 森山由紀子・鈴木亮子 (2011)「日本語における聞き手敬語の起源：素材敬語の転用」高田博行・椎名美智・小野寺典子編著『歴史語用論入門』大修館書店, pp.175-191.
- 師茂樹 (2006)「文字オントロジに基づく文字オブジェクト列間の編集距離」『CHISE Conference 2005 報告書 & CodeFest 京都 2005 資料集』pp.13-19.
- 諸星美智直 (1999)「近世武家・町人のあいさつことば」『国文学 解釈と教材の研究』44(6), pp.61-65.
- 矢島正浩 (2008)「近世中期以降上方語・関西語における「評価的複合形式」の推移」『国語と国文学』85(2), pp.55-69.
- 梁井久江 (2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5(1), pp.15-30.
- 柳田征司 (1967)「虎明本狂言と虎寛本狂言との語彙の比較：困惑の気持ちを表わす感情語彙に就いて」『安田女子大学紀要』1, pp.31-44.
- (1985)『室町時代の国語』東京堂出版.

- (2006) 「有情物の存在を表す「アリ (アル)」と「ヲリ (ヲル)」「キル (イル)」」  
小林芳規博士喜寿記念会編『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』汲古書院, pp.102-122.
- 矢野準 (1976) 「近世後期京坂語に関する一考察：洒落本用語の写実性」『国語学』107, pp.16-33.
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版.
- (2006) 「発話機能論の原理：命令・服従を例として」『日本語日本文学 (創価大学)』16, pp.1-17.
- 山口堯二 (1976) 「同語反復的仮定表現の情意性」『国語国文』45(6), pp.44-54.
- (1980) 『古代接続法の研究』明治書院.
- (1982) 「複文の構成・史的考察」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編『講座日本語学2 文法史』明治書院, pp.20-42.
- (1995) 「逆接仮定表現の末流」『語文』64, pp.1-11.
- (1996) 『日本語接続法史論』和泉書院.
- (2002) 「勧誘表現通史の試み」玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院, pp.231-242.
- 山崎馨 (1973) 「形容詞の発達」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院, pp.60-95.
- 山崎久之 (1963) 『国語待遇表現の研究』武蔵野書院.
- 山下由美子 (2014) 「「しよう」の意味・用法：〈非難〉・〈願望表出〉の「しようよ」」『日本語／日本語教育研究 (ココ出版)』5, pp.91-106.
- 山田彬堯 (2014) 「「間主観性」再考：日本語の「そういえば」をケーススタディに」『日本認知言語学会論文集』14, pp.201-211.
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ:「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院.
- 山田祐実 (2016) 『日本語史資料を対象とした自動アライメント』奈良先端科学技術大学院大学修士論文.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館.
- 山梨正明 (1986) 『発話行為 (新英文法選書 第12巻)』大修館書店.
- 山本真吾 (1988) 「今昔物語集に於ける「速ニ」の用法について」『鎌倉時代語研究』11,

pp.159-184.

- (1993)「平安時代に於ける動詞「をしふ(教)」の意味用法について：訓点資料の用例に注目して」『訓点語と訓点資料』92, pp.17-36.
- (2014)「鎌倉時代口語の認定に関する一考察：延慶本平家物語による証明可能性をめぐる」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房, pp.187-203.
- (2017)「訓点特有語と漢字仮名交じり文：延慶本平家物語の仮名書き訓点特有語をめぐる」『訓点語と訓点資料』139, pp.1-27.
- 湯澤幸吉郎 (1926)「軍記物の命令形について」『国語教育』11(9), 湯澤 (1940) 所収.
- (1927)「口語の命令形について」『国語教育』12(2), 湯澤 (1943) 所収.
- (1929)『室町時代言語の研究』大岡山書店.
- (1936)『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院.
- (1940)『国語学論考』八雲書林.
- (1943)『国語史概説』八木書店.
- (1954)『増訂 江戸言葉の研究』明治書院.
- 吉川武時 (1974)「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学校論集 (東京外国語大学外国語学部附属日本語学校)』1, pp.67-76.
- (1975)「「～てみる」の意味とその実現する条件」『日本語学校論集 (東京外国語大学外国語学部附属日本語学校)』2, pp.36-51.
- 吉澤義則 (1946)『国語史概説』雄山閣.
- 吉田金彦 (1971)『現代語助動詞の史的研究』明治書院.
- 吉田永弘 (2011)「タメニ構文の変遷：ムの時代から無標の時代へ」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.89-117.
- (2015a)「副詞「たとひ」の構文」『国学院大学大学院紀要 文学研究科』47, pp.23-48.
- (2015b)「「とも」から「ても」へ」秋元実治・青木博史・前田満編『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房, pp.299-320.
- 米田達郎 (2013)「大蔵流狂言虎明本の要求・依頼の表現について：(サ)シメを中心に」『近代語研究』17, pp.81-97.



# 論文の内容の要旨

日本語のいわゆる動詞命令形は、通常は次例(1)の如く聞き手への命令を表すが、(2)のように純粋な命令を表さない場合がある。

- (1) a. 何が欲しいのか**言ってみろ**。  
b. 警察に聞かれたら「知りません」と嘘をつけ。  
c. どうせペットを飼うなら犬にしろ。
- (2) a. もういっぺん**言ってみろ**、怒るぞ。  
b. 「さっき100万円拾ったんだ」「嘘をつけ」  
c. 犬にしろ猫にしろ、手間がかかることには変わらない。

(1)はそれぞれ、話し手が聞き手に「言ってみろ」「嘘をつけ」「犬にする」ことを求めるものとして了解できる一方、(2)は同形態による表現であるが、行為要求として理解することはできない。(2a)は「もういっぺん言う」ことではなく「それ以上言わない」ことを求めているし、(2b)は嘘をついた聞き手を話し手が咎め、これも「嘘をつかない」ことを求めるものである。(2c)に至っては「犬にしろ」に、何かしらの要求の意図を読み取ることもできない。本稿ではこうした命令形による他用法の生産を主な対象として、以下の問題を設定した。

- 「命令を表さない命令形」の諸用法はどのように派生し、どのような史的展開を遂げたか。
- 上の検討による個々の派生事例には、何らかの傾向が見られるか。類型性・傾向を持つならば、その要因はどこに求められるか。
- 一般的傾向として指摘される変化と比較したとき、これらの変化はどのような特徴を持つか。
- 併せて、「命令」側の変化には、どのようなものが指摘できるか。

第1章「現代語体系を中心とする命令形式の用法の再整理」では行為要求表現の成立条件を再検討し、命令形の中心的な用法を成立条件の側から規定することによって、「どのように条件から逸脱するか」という観点から派生的用法を分類し、第2章以降ではこの基準に従って分析を行った。

第2章「**「であれ」「にせよ(しろ)」の成立と展開**」では命令形が逆接仮定条件表現を構成する複合助詞「**「であれ」「にせよ(しろ)」**」の歴史的展開について見た。先行する「**「であれ」**」類は、「未然形+ば+命令形」という放任の構文を基盤とし中古に「(に)もあれ」

として成立する。放任の意を持つ前文と、放任された事態が成立した場合の結果や成立に関する話し手の態度を示す後続文とが逆接仮定条件の関係性を持ち、その関係性が1文として再解釈されることにより「であれ」類が成立したものと考えた。成立当初は「あり」を中心として、「も+用言命令形」の形で逆接仮定条件を提示することができたが、状態性の高い「あり」は動作に関する「～をしても」という意味合いを示すことができず、その領域に侵出する形で「もせよ」が産出され、近世には「にもせよ（しろ）」として定着した。「にせよ」類は「であれ」類と同等の意味・機能を持ちながら、体言・用言に対して同一形態で接続できる。このことが近世以降における「にせよ」類の使用を後押ししたものと考えられる。

このうち「であれ」類に関しては中古和文と漢文訓読文において顕著な差が見られるため第3章「漢文訓読文における「であれ」類と機能語化の文体差」において詳細に用例を検討した。当該形式は中古和文において規則的に「名詞+に+もあれ（まれ）」として現れるが、平安～鎌倉時代漢文訓読文では接続の自由度が高く、動詞、格助詞や係助詞の接続例、「名詞+まれ」や「も+まれ」といった「まれ」が「も+あれ」であった意識の喪失される例などが見受けられ、これらの一部は「まれ」のまとまりを1語として副助詞的用法を得たものと認められる。この結果は、文体の異なりによって文法変化の遅速、方向性が生じることを示唆するものであり、併せて類似事例を概観することで文法変化の研究に文体差の観点を導入することの可能性を述べた。

第4章「**「とはいえ」の成立と展開**」では、接続詞的用法と接続助詞的用法を持つ「とはいえ」が、近世前期に接続詞的用法から発生すること、中世以降に「とも言え」の例が見られることに注目し、「とはいえ」を従来説明されてきた「とはいえども」の「ども」が脱落したものとして見ることはせず「ともあれ（かくもあれ）」類からの類推的適用による派生であるものと見て、命令形による条件表現体系の中に位置付けた。

第5章「**「遅かれ早かれ」類の成立と定着**」では、「遅かれ早かれ」「善かれ悪しかれ」「多かれ少なかれ」といった語群の成立を第2章に見た「であれ」類の形容詞への拡張として捉え、スケール性を持つ形容詞を逆接仮定条件による集合の全体表示に用いる場合に、反義的な2語による「～かれ～かれ」という型が最も適していたことが、型の定着を促した要因であることを論じた。

第6章「**仮定的な「てみろ」の成立と展開**」では命令形が順接仮定条件文を構成する事例を扱った。成立以前に「補助動詞を伴わない命令形式文+それが実現された場合の脅し文」による事前阻止の構造が順接仮定条件相当の機能を持っていたことが想定され、仮定的な「てみろ」の成立当初も「主格は2人称かつ前接用言は意志動詞」という、命令形と「てみる」に由来する制約があった。主節も話し手による直接的な脅しを示すものに限られて



いたが、近世中期には事前阻止の意が背景化し、聞き手が認識していない情報の認識を要求する文へと変化することによって人称・意志性・望ましさの制約が緩和され、通常の順接仮定条件文により近い用法を獲得することとなった。

第7章「その他の派生的用法」ではいずれも簡略な語誌を示すに留まったが、逆接仮定条件と関連するものとして「ともあれかくもあれ」類と「さもあらばあれ」を、順接仮定条件と関連するものとして「嘘をつけ」類と「なぜといえ」を、第9章で扱う対人性の喪失と関連するものとして、話し手自身に対して行われる「命令」とそれが固定化した「てしまえ」などの補助動詞命令形、過去の事象に言及する命令形式文、「これみよがし」類を扱った。

これらの命令形式の文法範疇を超えた変化と併せて、中心的用法の変化についても考察を行った。第8章「希求から命令へ」では、無意志動詞命令形、形容詞補助活用命令形、否定「ざり」の命令形「ざれ」、文末形式「御～あれ」といった形式の衰退から、命令形がかつては非意志的な希求を表すことができたが、その領域が近世頃を境として意志性を有する事態に対する狭義的な命令へと縮小したことを示した。

第9章、第10章では前節までに述べた個別の変化事例に関して総合的な考察を行った。

第9章「対人的表現から非対人的表現へ」では、意味的類型の傾向として指摘される間主観化 (intersubjectification)・対人化 (interpersonalization) に逆行するものであることに注目し、対人的な意味を喪失する過程に焦点を当てた。喪失の過程としては、事態成立の放任と条件形式化、禁止の含意といった、行為要求の意を失う形で「対者性」を喪失するもの、第三者や話し手に向かうことによって「対聞き手性」を喪失するものがあり、間主観化・対人化の逆という変化が複数の層から成ることを示した。また、対人的意味の獲得に関しては、従来指摘される間主観化の一方向性はあくまでも傾向性であること、「非主観的→主観的→間主観的」というプロセスにも別個の変化が連続的なものとして捉えられているという誤謬があり、「非主観的→主観的」という変化と「非対人的→対人的」という変化として見るべきものであることを述べた。

第10章「命令形式から条件形式へ」では、個別事例のうち、条件形式的に用いられる命令形式に着目した。この変化は通常の複合形式の形成とは異なり、文末におかれる命令形式を用い、順接・逆接の両方に派生する点で特異なものである。第1章で見た行為要求表現の成立条件からどのように逸脱するか、という観点から変化を観察すると、事態が未実現であることだけは、順接・逆接ともに保持されていることが分かる。この変化は、未実現の事態が成立した場合の結果の予告や、その遂行に対する話し手の態度が放任の文の後続文として現れることによって仮定条件文的構造を持ち、その2文が1文として解釈されたことによるものであった。第9章で見た対人的形式の非対人的使用は、文末に位置

しやすい命令形式が文内部で非対人的形式として用いられるものであり、第11章で見る「(よ)うと」の成立も、文末で主観的意味を持つ形式が文中で用いられることで、その主観性を減衰させていく変化である。このように見たとき、本稿で見てきた事例は主観化・間主観化といった意味変化の類型の一方向性を否定するのみならず、その逆の指向性を持つ変化が「文末から文内部へ」という統語的变化に伴う形でまとまって現れるものとして理解される。

第10章の検討のため、第11章「「(よ)うと」の一群の成立と展開」では命令形式以外の事例として、「(よ)うと」「(よ)うが」「まいと」「まいが」の一群について扱った。中世前期においては意志文の環境下にあった「～む+とも」が「むとも」として固定化したために文末用法の意を喪失したことによって、非意志的述語への接続や主節主語と一致しない主格を取ることが可能となり、「(よ)うと」が成立したものと考えた。「(よ)うが」も、「(よ)うと」の構造への類推的適用に後押しされながら、同様の過程を経て成立したものと考えられる。この形式の成立は話者の発話場・発話時に縛られる文末用法がその話者指向性を減衰させるという方向性を持つ変化であり、意味的变化の類型として指摘される「主観化」(subjectification)に反するものである。さらに、「文末から文の内部へ」という変化として、条件形式的に用いられる命令形の用法と併せて統一的に捉えることができる。